6．書　評

「ウェルビーイング」



著者：前野隆司・前野マドカ
出版：日本経済新聞出版
発行：2022年３月15日

最近、「ウェルビーイング」という言葉をよく見かける。

この言葉自体は新しいものではなく、1946年に設立された世界保健機関（WHO）の憲章に初めて登場している。ここでは、憲章における「（広い意味での）健康の定義」のなかで使われた単語で、直訳すると、「良好な状態」だが、最近は「満たされた状態」と訳されることが多いようである。

幸せを表す英語に「ハピネス」もあるが、「ウェルビーイング」は、狭い意味での心身の健康だけではなく、心の豊かな状態である幸福と、社会の良好な状態をつくる福祉を合わせた、心と体と社会のよい状態が「ウェルビーイング」だとしている。一方、ハピネスは「楽しい」「嬉しい」など幸せの感情の一部を表すものなのでニュアンスが異なる。

本書では、「ウェルビーイング」について網羅的に解説され、著者の前野夫妻が10年以上前から本格的に大学で研究をされてきた「ウェルビーイング」について、基本的知識をわかりやすく解説している。研究者として、また、ビジネスの推進者として活躍する前野夫妻が、対話しながら書き上げられており、単なる解説にとどまらず、未来への提言もあり、「ウェルビーイング」の基本からを知ることができる一冊である。

SDGsの３番目の目標に、「Good Health and Well-Being」（すべての人に健康と福祉を）がある（ここではウェルビーイングは福祉と訳されている）。この扱いからすると、ウェルビーイングはSDGsの一部とみることもできるが、実際は、SDGsの各目標は、人類に限らず地球上のすべての生物がより

よく生きるためにあるので、17あるSDGs目標全体を包括する上位概念ととらえる方が良いと言われている。

また、産業面においても、多数の企業や経営者が「ウェルビーイング」の考え方を取り入れた企業経営を行っており、そこでは、「近江商人の三方よし」に通じるものがあり、「自分よし、お客様よし、社会よし」という総合的な視点が共通している。そして、この考え方は産業面にとどまらず、地域活性化を目的とした自治体の取り組みや、さらには、夫婦関係など家庭でも同じことが言えるとされている。今後さらに、「ものづくり（製造業）」「ことづくり（サービス業）」「人づくり（教育）」「家庭づくり」「町づくり」など、広い意味での「ウェルビーイング産業」が大きく進展すると思われる。

現代はVUCAの時代といわれ、もともと先の見えない変動期といわれていたところに、新型コロナによってさらに先が読めなくなっている。今後、大きな時代変化が進む中で、「ウェルビーイング」の時代へと動いて行き、私たちの人生、働き方、組織運営の在り方、そして社会を劇的に変える「ウェルビーイング」に関する知識は、これからを生きるすべての人に取って必要になっていくのであろう。

第１章　ウェルビーイングとは何か
第２章　社会とウェルビーイング
第３章　ウェルビーイングの研究
第４章　経営とウェルビーイング
第５章　地域・家庭とウェルビーイング
第６章　幸福度の計測・向上事例

起業教育研究会　企画委員
奈良県立奈良情報商業高等学校
奈良県立商業高等学校
校長　谷口　達之輔